

## (2) 子どもの損得勘定

## 〈目的〉

現代の子どもは打算的だと言われているがその意識構造はどうなっているのか。打算とは、損得の計算をして、損をしないように、得をするように行動しようとする傾向であると考えられる。そこで子どもの損得勘定とはどんなものであるか、その性質を明らかにし、現代の子どもが行動選択の基準として、どの程度損得勘定を取り入れているのかを検討する。

損得の意識が働く側面には、個人の中で完結する選択、たとえば「時間とお金のどちらをとるか」という側面や、対人関係の中で、自己の損得と他者の損得とがかわるような側面などが考えられる。とくに対人関係においては、自己の得をとる、あるいは損をしないようにする行動は、その結果として他者に損をかけることになり、他者から負の評価を受けることになり、その作用は複雑である。そこにおいて、人との関係を重視しそれを維持しようとするために損をしてしまったか之ないと考えるか、それとも自己の損得を重視するか、そのバランスのとり方によって個人の行動が決定されることになる。しかもその場合、相手との親密度によって他者を尊重しようとする傾向が異なり、親密度の高い者に対しては、自分の損をおしてもその関係を保とうとする行動がとられると考えられる。

本研究は、対人関係場面において、子どもが自己の損得と人間関係を重視しようとする意識との間で、どのようにバランスをとろうとしているのか、とくに、友達関係の親密度の違いによるバランスのとり方の変化を明らかにしようとするものである。

## 〈方法〉

## (1) 調査対象

東京都区内及び千葉県下の公立小学校・中学校より、小学校4年生、300名、6年生、

## 子どもの金銭観 (その1)

○小田中恵子 (お茶の水女子大学大学院)

馬場道子 (お茶の水女子大学大学院)

300名、中学校2年生、300名、計900名をサンプルとして抽出した。

## (2) 調査時期

1976年5月～6月。

## (3) 調査用紙の構成

子どもの日常・学校生活の中で、友達との関係において損得の意識が働くと思われる場面を i) お金やものに関する損得がかかわる場合、ii) 自分の労力の提供に関する損得がかかわる場合、iii) 勉強に関する損得がかかわる場合の3領域に分け、それをもとに20場面を設定した。親密度は、7クラスの友達で、①気があいつきあうことが多い友達、②特別に気があうわけでもなくたまにしかつきあわない友達、③気があわなくてほとんどつきあわない友達、の三種のタイプの友達の関係によって表されるものとする。回答は、1) 自分の損になっても友達のために何かをしようとする行動 2) 自分の損失を避ける行動から二者択一的に選択させた。なお、調査に用いた項目を以下に若干あげておく。

## 調査項目例

i) キャッチボール(ボール投げ)をしていて友達が投げたボールがコースをはみでて、よその家のがラスをこわしてしまい弁償する時。(1)半分出す。(2)出さない)

ii) 本屋に行こうとしていた時、友達からある雑誌を買ってきてほしいと言われたが、その本屋では売り切れで別の本屋はそこから遠い時。(1)別の本屋まで買いにいってあげる。(2)売り切れだったという。)

iii) 明日のテストにそなえて勉強していると、友達が至急相談にのってほしいことがあるからと訪ねてきた時。(1)相談にのってあげる。(2)その日はことわる。)

## 〈結果〉

当日、資料配布。